

釉裏金彩

吉田美統のわざ

平成23年1月

「釉裏金彩 椿」が誕生した。

この作品は、重要無形文化財
「釉裏金彩」保持者である
吉田美統の複雑で精緻なわざを
構想段階から克明に
記録したものである。

「釉裏金彩」を通じた

吉田の深いメッセージが、

観るものの心に強く刻まれる。

平成22年度

工芸技術記録映画

35ミリ・カラー・32分

企画 文化庁

製作 山陽映画

吉田美統のわざ 釉裏金彩

1. オープニング・いのちとの対話



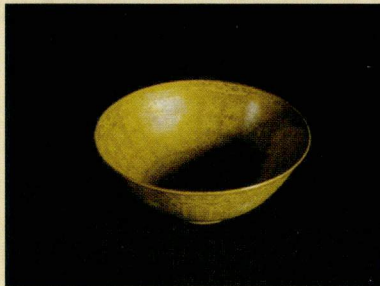
吉田美統のわざを象徴的に紹介する。

2. 陶芸の金彩・その歴史と伝統技法



国内外の金彩の名作を紹介しながら、釉裏金彩を育んだ伝統技法の歴史を語る。

3. 釉裏金彩の誕生と発展



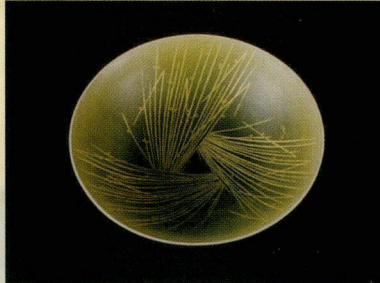
釉裏金彩の道を拓いた竹田有恒の作品を紹介し、釉裏金彩の魅力を探る。

4. 吉田美統の略歴



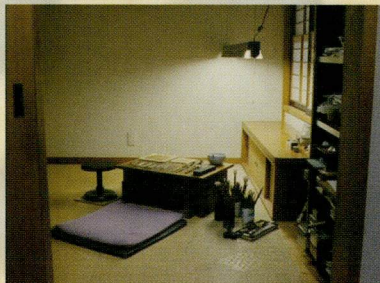
吉田美統の略歴を古い写真と共に紹介。

5. 吉田美統の世界・その技法と作風

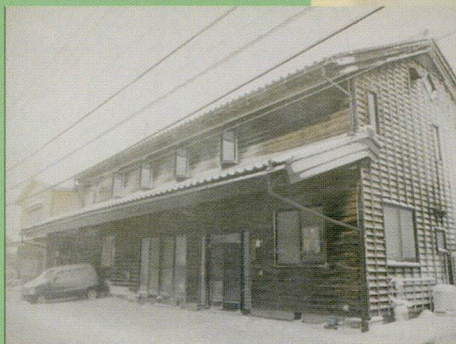


代表的作品をアップで見せながら、技法や作風の特徴を語る。

6. 工房の紹介

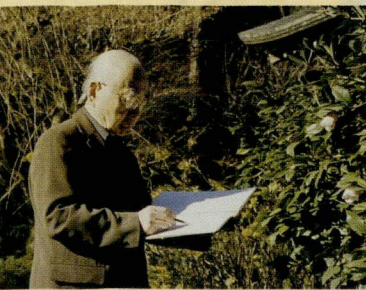


創作の開始を待つ仕事場はいたって質素である。



冬の錦山窯

7. 意匠構想を練る



作品の構想を、
どう練っていくか、
インタビューを織り込み
ながら紹介する。

8. 大皿の削出し



大皿の縁を構想に
合わせて七角形に
削出す。

焼成

9. ストライプの描き込み



下書きをした大皿に
釉薬でストライプを
描いていく。

焼成

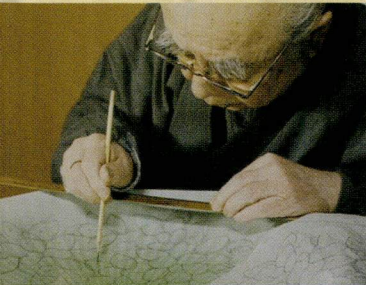
10. 素地の彩色



下地釉となる釉薬を施す。
吉田が選んだのは
あたたかい萌黄色である。

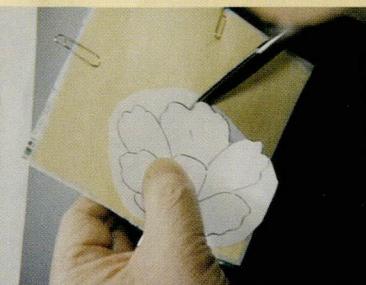
焼成

11. 下地を器面に写す



図案を記した竹紙を
裏返して、文様を
懐炉灰でなぞる。

12. 箔切り



二種類の金箔を使い分け
ながら、花や枝葉の
複雑な姿に切り出す。

13. 箔置き



大皿に布海苔を塗り、
200枚を超える箔を
置いていく。

14. 針彫り・付け描き



手作りの用具により
針彫りを行った後、
金泥を描き加える。

焼成

15. ぼかし



花の中心部を
マスキングし、
和絵具をかけて
花の奥行きを表現する。

16. 釉掛けと最後の焼成



最後にガラス質の
釉薬で器全面を覆い、
最後の焼成をする。

焼成

17. 技術の伝承

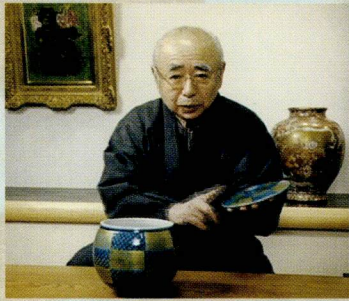


吉田は、創作の僅かな
暇を見つけては、
九谷焼技術研修所で
講師を努めている。

18. 完成作品「釉裏金彩 椿」



創作から二カ月、
吉田の深い想いが
籠められた
「釉裏金彩 椿」が
誕生する。



吉田 美統（よしたみのり）

昭和7年、石川県小松市の赤絵金欄手を得意とする窯元に生まれる。釉裏金彩の技法は、まず磁器の上に九谷色絵の上絵具を掛け本焼きして地色を作り、その上に文様に切った金箔を置いて焼き付け、さらに全面に透明釉を掛けて焼き上げるものである。下地となる色釉、金箔の扱い方等、技法・表現上の研究を重ねて洗練度を高めた。地色と金箔の組み合わせから生まれる品格のある美しさ、草花文等の表現に見る典雅な世界は、陶芸の金彩の美しさに新生面を開き、優美な芸域にまで高めている。平成13年、重要無形文化財「釉裏金彩」保持者に認定される。

協 力

石川県立美術館
石川県九谷焼技術研修所
大阪市東洋陶磁美術館
株式会社 錦山窯

製作スタッフ

製 作 塩谷 泰司
脚本・監督 日下部水棹
監督補佐 後藤 健
撮 影 故倉 好男
平岡 隆
太田 哲哉
照 明 木戸 美紹
中川 逸人

編 集 寺 寄 孝
録 音 塚村 俊孝
選 曲 上里 盛憲
現 像 IMAGICAウエスト
録音スタジオ 東京テレビセンター
語 り 湯浅真由美